

盛云ある夜不思義に夢をに見あり角館通くと見
おふ所あり七旬小余と覺ゆる老翁衣冠正ま家盛
公小ひいて宣ひある汝我代に居る住すと一其子孫
長く候へしとや館を角館に移しふむ子孫繁昌
す金一汝日以多悲憐愍の心深き故告しむるあり
我は是角館横嶽の天沼天神あり我を護すを
汝を去るよふ羽れと二月九日久盛公初の家臣等を
よひ来しを仰ふ事あり久盛云ふ曰我見よふ依て
角館城を修理し成同年七月十日門屋を所立
角館白入城と成同年十月十日辰刻大地震きて

三日三夜止不止都鄙一統の大地震百年の老人も覺
ずとあり遠國に逃山に居れて川を堰の邪社仏閣民
家をとり居るは時門を城に金陽院表に降と人民
悉く沉滅す角館に在る動らず是横嶽天神に加
護なり近則横嶽の天神を角館の本城に移さし
て六間四面の社堂を建城内の法守と教ひ社願拾九
貫文哥附毎月二十日御冬詣子孫繁昌を祈り
むふ應永三十二年新光院の所宇に當り諸王大乱
永享二年家盛公又十六年隱居角館西山倚と
しよ所に法祥ふさし年月をより久盛云永享